

研究ノート

静岡・デンマーク牧場におけるデンマーク人農業指導者

エミール・フェンガーの足跡

－青砥好夫氏へのインタビューを中心に－

佐保吉一

The Footprints of a Danish Agricultural Engineer Emil Fenger at the Denmark Farm in Shizuoka

- From an Interview of Rev. *AOTO Yoshio* -

SAHO Yoshikazu

Abstract

A Danish agricultural engineer Emil Fenger contributed greatly to the Japanese dairy farming. During his nearly 90 years of life time, he lived and worked three times, altogether for 10 years in Japan. The first time in Hokkaido (1923-28), the second time in Yamagata (1951-54), and the third time in Shizuoka (1963-64). At my previous study, I mentioned that Fenger's third stay in Shizuoka was not satisfactory one, because of the bad relationship between Fenger and missionary Rev. Harry Thomsen. But Fenger formed an infrastructure for the Farming Center (today's "Denmark Farm"). And this time I happily encountered Rev. Yoshio Aoto (Kushiro Church) who used to work with Emil Fenger at Shizuoka.

In this article I have tried to explore the hitherto unknown information on the Denmark Farm using the interview materials and pictures owned by Rev. Aoto. According to him, although Fenger was 70 years old, he was still a real farmer, could use the big Danish scythe alone, and could control the cows. And it was reconfirmed that there was a negative relationship between Emil Fenger and Rev. Thomsen. Fenger being concentrated on dairy farming and while Thomsen was in charge of the management of the whole project over the Farm, it was obvious that the core value of the two was incompatible and they couldn't get along well with each other. And the pictures show the development of the Denmark Farm, especially in the very beginning phase and have proved that Mr. & Mrs. Fenger

were truly staying there.

Overall Rev. Aoto was very impressed with Fenger's sincere attitude toward dairy farming, that formed the backbone of the reconstruction of Denmark, after the war of 1864. But the time of construction of the Denmark Farm was progressive era around Tokyo Olympic time in Japan, not too many paid attention to the dairy farming and the vision or the project of the Denmark Farm by Rev. Thomsen hardly got anywhere.

はじめに ―フェンガーと3度の日本滞在―

デンマーク人農業技術者であるエミール・フェンガー Emil Fenger (1894-1983¹、以下フェンガーと略) は約 90 年に亘る長い生涯の中で 3 度、合計約 10 年間に渡って日本に滞在し、農業(酪農)指導にあたった。1968 年にはその功績が評価され、日本政府から明治百年を記念する叙勲も受けているほどである。フェンガーの初回の日本滞在は 1923~27 年で、札幌市の北西に位置する琴似に当初家族 4 人で滞在した²。招聘元は北海道庁で、フェンガーはデンマークでの選抜を経て来日し、琴似では北海道農業試験場内の 5 ヘクタールの土地を日本人助手も使いながら、基本的には単独で切り盛りしていた。実直なフェンガーは人々の信頼も獲得し、農閑期には同時期に真駒内で営農・農業指導にあっていた同僚のデンマーク人農家、モーテン・ラーセン Morten Larsen と共に道内を講演や農業指導で巡回した³。北海道におけるフェンガーの活動は評判がよく、それが戦後の第 2 回日本滞在に繋がった。2 回目の日本滞在は戦後の食糧事情が劣悪で、栄養価の高い牛乳や乳製品を産み出す酪農に期待された時期に実現した。国(農林省)の招きで山形県新庄市に 1951-54 年、妻のフリーダと共に滞在した。1951 年当時は GHQ による占領が行われている最中で、新庄では模範農場(デンマーク農法指導農場)を設立し、そこでデンマーク式酪農を実践・指導するとともに、東北各地に出張して農業指導を行なった。そして、3 回目となる最後の日本滞在が 1963 年 3 月~1964 年 10 月で、静岡県袋井市に所在し、現在はデンマーク牧場と呼ばれる場所で生活し、牧場を一から立ち上げた。この地へはノルウェーに本拠地を置くキリスト教伝道団体から、農場と農学校を立ち上げるために是非来て欲しいとの要請を受け、来日したのであった。第 3 回目の滞在については、旅費は支給されず、フェンガーと妻のフリーダは、デンマークで農場や農機具を売却し、それを用いて私費で日本に来たのであった。

フェンガーの業績や農業指導に関しては、北海道時代、山形時代については、招聘元が道庁や試験場といった公的機関であったことから、公的な記録や報告書が存在する⁴。さらにフェンガー自身が、デンマーク式農法や農業について日本の雑誌に寄稿する一方、デンマークにも日本の農業や文化に関する記事を農業雑誌や新聞に投稿している⁵。しかし、第 3 回目の静岡時代については、ノルウェーに本部を置く私的な団体が招聘元であったため、日本側に日本語の記録としては殆ど残っていない。新霊山教会が発行した 40 年史が唯一のもので⁶、他に市報「ふくろい」にいくつかの記事が掲載されているのみである⁷。それゆえ、フェンガーの静岡

時代に関しては資料が少なく、研究も限られている。

このような状況下、拙稿で筆者が入手したデンマーク語の史・資料を用いてフェンガーの静岡時代の一部を明らかにしたが⁸、今回デンマーク牧場でフェンガーの元で実際に働いた経験を有する青砥好夫氏（以下、青砥氏と略）と幸運にも出会い、インタビューが実現した。さらに青砥氏が持っておられた当時の写真も見せて頂くことが出来た。本稿ではこのインタビュー記録と写真を用いて、不明な点が多いフェンガーの静岡時代の一端を明らかにしたい。

2. フェンガーとデンマーク牧場

2-1 デンマーク牧場

まず、デンマーク牧場とその創始者であるハリー・トムセン Harry Thomsen（1928-2008、以下トムセンと略）について簡単に述べておきたい。デンマーク牧場は現在の静岡県袋井市山崎に所在し、広さは約 50 ヘクタールである。ここにノルウェーに本部を置くキリスト教の宗教団体クリスチャン・ミッション・オブ・ブッディスト⁹から、派遣された宣教師がデンマーク人のハリー・トムセンである。この宗教団体は仏教徒にキリスト教を布教することを目指し、まず香港に道風山を建立した。トムセンは 1956 年に妻のイーネ・マリエ Ene Marie(1931-) と共にアメリカ経由でまず京都にやって来た。当初は修学院を中心に布教活動を開始したが、やがて香港の道風山に相当する施設を是非とも日本に建設したいと思うようになり、あちらこちら物色した結果、現在の静岡県の袋井市山崎の丘陵に適地を見いだした。トムセンはこの地を新霊山 Shin Rei San と命名し、1962 年より土地の売買交渉を開始した。周辺が茶や蜜柑を栽培する農家であり、田舎の地で布教をスムーズに進めるためにはデンマーク式農業を行なう農場、さらには酪農技術を学習するデンマークの国民高等学校をモデルとした農業学校も併設する、一大ファーミングセンターの建設を目指した。その基盤となる農場の酪農指導者として、当時デンマークに戻っていたフェンガーに白羽の矢が立てられたのである。フェンガーは北海道や山形でデンマーク農法を指導した豊かな経験を持ち、さらにデンマークの農場でも日本人実習生を受け入れており、新霊山のファーミングセンターにとって最適の人であった。1962 年には土地の取得が始まり、約 50 ヘクタールの丘陵地が新霊山のものになった。

また本来の布教を本格的に開始するためにトムセンはまず、1964 年に宗教法人「日本キリスト道友会（以下、道友会と略）」を設立し、登記した。地元では、道友会の所有地や施設、あるいは宗教法人自体が「デンマーク牧場」または「トムセン牧場」と呼ばれている。1964 年 10 月には鐘撞き堂が完成した。1965 年秋にはこのデンマーク牧場の地にスカンジナビア酪農センターと最新の酪農技術を学ぶ寄宿制の付属農学校が竣工した¹⁰。その後ようやく 1969 年には礼拝堂が完成し 10 月には献堂式が行われ、特徴あるキリスト教の布教が本格的に始まることになったのである¹¹。

2-2 青砥好夫氏について

まず、フェンガーの『自伝¹²』に登場する青砥氏に関する記述をみてみたい。青砥氏の名前

佐保吉一

が現れる箇所は次の2点である。

- 1) 農業助手としてアオトさんとニシカワさんがいた。アオトさんは2年間の農業学校在籍経験があり、ニシカワさんは大学で農業教育を受けていた。楽しい人たちであった。

Endvidere havde vi Aoto-san og Nishikawa-san, den første med 2 års landbrugsskoleophold den sidste med en agronomuddannelse, det var fornøjelige folk.
(『自伝』189頁)

- 2) アオトさんは大変美しい声を持っている(彼は今、牧師になるための勉強中である)

Aoto havde en meget smuk sangstemme (han studerer forøvrigt nu til præst) (『自伝』190頁)

これらの記述をうけて筆者は、Aoto氏が北海道出身でしかも、牧師になっていると仮定して、漢字に変換して青砥または青戸とし、インターネット上の情報を検索した結果、幸運にも現在、日本キリスト教会釧路教会(釧路市浦見2丁目1-16)で牧師をしている青砥好夫氏を探し当てることのできた。そこで2019年3月9日(土)午後には釧路教会を訪れ、インタビューを行なった。内容については次項に記す。



図1 日本キリスト教会釧路教会



図2 青砥好夫牧師

次に、ご本人から頂いた履歴書を元に略歴を記しておきたい。青砥好夫(あおと よしお)氏は1940年9月1日北海道興部の酪農家に生まれ、北海道立興部高等学校卒業後、1960年7月に農村伝道神学校研修科に進み、同校卒業後の1962年4月より日本基督教団興部教会付属興部幼稚園に勤務した。そして一年後の1963年5月には現在江別市にある酪農学園大学に勤務し、1963年7月からは、静岡県にある日本キリスト道友会ファーミングセンター(デンマーク牧場)に務めた。同ファーミングセンターを1965年10月に退職し、その後農村伝道神学校神学科に入学(1966年)した。同神学校を1970年卒業し、卒業と同時に1970年より日本基督教団牧師となり、男鹿教会、鳥羽教会、春採教会、玉川教会、秋田高陽教会、春採教会を経て、現在釧路教会牧師として10年目である。

2-3 青砥氏へのインタビュー記録¹³

<静岡のデンマーク牧場に勤務した経緯>

佐保 デンマーク牧場に行かれることになった経緯を教えてください。

青砥 私、その頃（注：1963年）ですね、酪農学園大学に創世寮というのがあったのですが、そこの職員として扱ってもらいました。それはなぜかというんですね、農業青年をアメリカに送る事業があり、私ははじめアメリカに行くまでの予定でそこにいました。その頃、学長の樋浦誠先生がどうも静岡のデンマーク牧場から頼まれて、北海道で酪農をやっている青年を送って欲しい、と頼まれたみたいです。それで私に行ってくれと言うんです。樋浦先生は、デンマークから来たフェンガーという人がいると、アメリカなんかに行くよりもデンマーク酪農を学んだ方がいいんじゃないかと言うんです。アメリカに行くのもいつになるか分からないし、そこに行ったらデンマークに行くチャンスも十分にあると、だから行ってくれと言うんですよ。それではということで静岡に行ってみたくてです。

佐保 酪農学園とは何か関係を持っておられましたか。

青砥 兄貴が酪農学園がやっている三愛塾¹⁴に入っていたんです。その手伝いをしていました。三愛塾というのは酪農家青年での、神を愛し、隣人を愛し、土を愛するという精神ですね。興部の三愛塾は盛んで、あの小さな町なのに約60人も酪農家の青年たちが入っていました。

佐保 デンマーク牧場に行かれた時はもう、フェンガーは来ていましたか。

青砥 私が行ったときにはもう来ていましたね。そして、先にフェンガーさんが帰られてその後ムラーさんが来て¹⁵、ムラーさんとも一年くらい一緒にやりましたね。

<デンマーク牧場での仕事・生活>

佐保 牧場の仕事は朝5時、6時から始まったのですか。

青砥 そうですね。時間は覚えていませんが、朝早くから起きて、一仕事してから搾乳をして、放牧をして、それから食事をしました。

佐保 食事はフェンガー達と一緒にですか。

青砥 いいえ別です。私たちの牛舎の横にある宿舎には台所もありましたから、自炊でやっていました。自分で作っていました。

佐保 農作業には機械は使用されましたか。

青砥 当時日本ではまだ珍しいトラクターがありました。ファーガソンのトラクターです。それを乗り回していました。色々なアタッチメントが付いていて、4、5種類の作業が出来ました。

佐保 デンマークからもって来たのですか。

青砥 そうです。クボタなんかからは実験農場にしてくれという事で来ておりましたが、日本ではまだ試作の段階でした。ファーガソンのトラクターを乗り回していたので、酪農のプロみたいでしたよ。酪農学園からも実習に来ていました。

佐保 そうみたいです。フェンガーの『自伝』の記述にもありました。酪農学園からの実習

佐保吉一

生¹⁶6名との生活は楽しかったようですね。ところで、フェンガーの『自伝』に出てくる同僚の西川さんはどのような経緯でデンマーク牧場に來られたのですか。北海道の方でしたか。

青砥 酪農学園大学の一期生か二期生だと思います。西川さんは山形の無教会派の独立学園出身¹⁷で、酪農はしたことがないんですね。私の後に來ました（注：1964年4月）。給料は西川さんと同じでした。私と西川さんは牛舎の近くの宿舎で住んで、別々の部屋でしたね。2部屋しか無く、もちろん風呂とトイレは共有でしたが。

佐保 給料はデンマーク牧場から貰っていたのですか。

青砥 そうです。そして、デンマークの生活習慣は、日本の生活習慣と違ったんですね。

ある時、日曜日に私は教会へ行き、西川さんは無教会派なので教会に行かなかった。その時に、フェンガーさんの奥さんに英語を習っている女の子、セツコさんといったかな。彼女がちょっと遊びに來たんです。それで西川さんが彼女を中に入れて話をしたんです。それを後からトムセンさんが聞いて、デンマーク人の習慣では許されないことだったんですね。女性を部屋に入れるということは。

佐保 不思議ですね。今では全く普通のことなのですが。

青砥 それで大変おしかりを受けたんですね。そんなこともあり、私の後を継いで居てくれるんだらうと思っていたのですが、西川さんは先に辞めてしまうんですね。

佐保 今、西川さんはどうされていますか。何か連絡はありますか。

青砥 西川さんが今、どうしているのかは分かりません。北海道の瀬棚というところにいるのかな。一時、頼まれて酪農学園のとわの森の高校（注：現「とわの森三愛高等学校」）の寮監をしていました。その時に西川さんと野幌教会で何十年ぶりかで再会したことがあります。その後退職して瀬棚に戻ったんですね。

佐保 瀬棚と言えば、そこで国民高等学校（ホイスコーレ）をやっているという人で、酪農学園出身の河村さんという方がおられます。

青砥 瀬棚の河村さんとは親しいんです。彼は酪農学園から実習に來たんです。

佐保 あのデンマーク牧場に実習に來た6名の一人ですか。

青砥 そうなんです。あの時に來たんです。彼はその後デンマークに行ったんじゃないかな。

佐保 それは初耳です。国民高等学校へ行かれたのでしょうか。後に国民高等学校を始められたくらいですから。

青砥 ムラーさんか、トムセンさんの紹介で行ったんじゃないかな。

佐保 通訳の嶋屋さんはどんな方でしたか。

青砥 嶋屋さんは同志社の経済を卒業して、奥さんと來ておりました。もっぱらフェンガーさんとカムラーさんの通訳で、一緒に行動していました。でも、宙ぶらりんな感じでしたね。

佐保 嶋屋さんはその後どうされていますか。

青砥 特に付き合いはないですね。後に九州で牧場を始められたと聞いていますが、その後どうなったかは分かりません。九州と私は北海道在住ですから。

佐保 フェンガーの『自伝』には、北海道の中曾根先生（注：酪農学園大学教授の中曾根徳二）

を通じて牛を購入したとありましたが、それに関係したのは青砥さんでしたか。

青砥 はい、私の中曽根先生のところに行きました。そして北海道から貨車で牛を連れてきたのは私なんです。草をやったり水をやったり、袋井まで連れてきました。一週間位かかったんじゃないかな。その後が面白いんです(笑)。フェンガーさんは3頭の牛を連れて、駅からデンマーク牧場まで結構の距離はあるんですが、先に悠然と行っちゃったんですよ。嶋屋さんが残りの2頭を引いていくはずだったんですよ。嶋屋さんはそんなことを今までやったことがなかったんです。それで牛が町の方に逃げて暴れ出して、大騒ぎですよ(笑)。牛が路地に入っちゃって、動かなくなったんです・・・(中略)・・・それで町の中で有名になっちゃって。大騒ぎですよ。その時若い嶋屋さんは根を上げていましたね。それでフェンガーさんが途中で戻ってきて、その牛を連れて行きましたね。嶋屋さんは死ぬ思いしたんじゃないかな。

<デンマーク農法>

佐保 牧場の仕事の中で、これがデンマーク農法だと思われたのは何でしょうか。

青砥 そうですね、牛の体重、体格、そして乳量に合わせて飼料の計算をやっていましたね。日本では当時そこまでまだやっていなかったですね。飼料計算の単位は忘れてしまいましたが。

佐保 その他に何かありますか。これがデンマーク農法だと思われたものが。

青砥 大きな鎌と一緒に草刈りをするんですけど、20代前半の私たちが70歳のフェンガーにはかなわなかったですね。最初は若いので元気でやれるんですよ、だけど1時間か2時間たつともうかなわないですね。根気というか。大したものでしたね。70歳のフェンガーにはかなわないですから。

佐保 鎌はやはりデンマークから持ってこられたのでしょうか。

青砥 そうですね。デンマークから持って来た物もありましたですね。フェンガーさんは鎌から、鍬からトラクターから、使うコツを知っていましたね。家畜用ビーツなんかは種を蒔いたら間引きをしますよね。間引きする時にフェンガーさんは鍬でやるんです。日本だったら普通は手で引っ張って抜くこともするでしょう。そういうことは、一切しない。それをやったら怒られるんです。鍬一丁で全部やるんですね。また別の時に、僕なんかは農家出身だから割と器用で、鎌を使うのがうまいんですよ。でも、それはだめだということですね。もうちょっと機械をうまく使えと。それであの牧草なんかも綺麗に刈ってしまうとダメなんだと。ある程度残して機械で作業をうまくやらなきゃだめだと。そのほうがずっと効率がいいんだと言うんです。道具と機械を使う農業と、非常に計算された酪農の、牛の飼い方、飼料もそうですけど、乳量に合わせたものをちゃんとやるんですよ。その頃三愛塾でも習っているんだけど、なかなかそういうものを自分の所で取り入れるところまでいってなかったんでしょうね。私がお後、農村伝道神学校に行ったとき牛や豚を飼っていて、カナダから来た宣教師のオーツ先生のもとで助手みたいに学生を指導しました。やっぱり飼料のやり方、飼い方、素人には出来ないですね。飼料計算とかね。その

飼料計算が基本になってました。ムラーさんもそのことには詳しくはなかったですね。

佐保 牛の扱い方で、何か日本のやり方と全然違うものはありましたか。

青砥 牧草でも山そのものに種を蒔くんですね。普通日本だったら綺麗に耕してから種を植えるんだけど、山そのものに蒔くんですよ。肥料もまいて。そして牛に踏ませて、そこから芽が出てくるんだ、そしてそれが牧場地になっていくんだ、と言っていました。でも結局はあまりできませんでしたね。時間が短かったんでしょうね。1年か2年じゃ実らないですよ。その辺はやっぱりトムセンが口出しをするんですね。経済的にどうのこうのとか、これでうまくいくとかいかないとか、口を挟むんですね。そのあたりがフェンガーとうまく行かなかったんじゃないでしょうかね。その口を挟むことに通訳の嶋屋さんは困っていました。

佐保 嶋屋さんは愚痴っていませんでしたか。

青砥 そうですね、多少愚痴ってましたね。

<フェンガーについて>

佐保 フェンガーは青砥さんから見て、どのような人でしたか。

青砥 そうですね、無口で実直な人でしたね。優しい人でもありました。ただ道具を使うとか牛の扱いとかは厳しかったですよ。酪農に関しては厳しかったですね。僕は器用な方なので、綺麗にするのですが、綺麗にやり過ぎるのはダメだと言っていましたね。褒めてもらえるのかなと思ったら、逆に叱られてしまいました。北海道で酪農をしていたフェンガーが来るんだから、別格なんだと思っていた。酪農学園の先生方は皆弟子のようなものですから。樋浦先生には、フェンガーさんから学べるのは素晴らしいことなんだからと、言われて静岡に来ましたから。フェンガーさんからはデンマーク語も習いました。

佐保 デンマーク語を習われたんですか。初めて知りました。フェンガーの奥さんはどのような方でしたか。

青砥 奥さんはとてもチャーミングでユーモアのある人でしたね。英語を習っている時にいつもクイズを出すんです。割と茶目っ気があって、親しくしてくれました。いろんなご馳走も頂きましたね。そしていつも夕方は二人で散歩していました。

佐保 夕方の散歩は北海道時代からの習慣でした。

<デンマーク牧場の責任者であるトムセン牧師について>

佐保 牧師のトムセンはどんな方でしたか。

青砥 機嫌の良いときとそうでない時がありましたね。気むずかしそうな感じで気を遣いました。たまに叱られるとがありました。

佐保 どういうことで叱られるのですか。

青砥 うーん、生活習慣とかでしたかね。そんなに親身な感じは無かった。同じクリスチャンとして礼拝に行っても、機嫌が悪そうだった。直ぐに顔に表れるんですよ。機嫌の悪いときには。だから気を遣いましたね。そして彼はお金の力というか、壮大なビジョンはあ

ったんでしょうけれども、あそこではちょっと無理でしたね。合わなかったですね。私の使命もここでは果たせないと思いました。フェンガーさんもムラーさんも皆帰っていきましたから。国民高等学校が出来るというのは良いことだと思っていましたが、生徒さんが全然集まらなかったですね。この学校の世話をするために京都から臼井さん達も来ました。仲良くして貰いました。

でもトムセンさんは時々、日本の鳥居とか釣鐘を気に入って、日本の文化がよく出ていたと言っていました。そして村田秀雄が好きでしたね、特に王将という歌が気に入っていました。また、京都までよく荷物を取りにマツダの三輪で行かされました。冷蔵庫とか洗濯機とか。横浜にもよく取りに行きました。外に行けるのが息抜きで楽しかったですね。西川さんはもっぱら留守番でした。

佐保 トムセンは地元の人と何か繋がりや関係はありましたか。

青砥 初期の頃は回りが農家ですから、冬の農閑期に回りの農家の方が開墾のアルバイトにきていました。後は橋渡しの行事とかの時ですかね。やっぱりクリスチャンということで違和感があるんですよ。トムセンさんはデンマーク人でそこそこプライドが高いんです。地元の人とはお金の関係以外はあまり付き合いがなかったんじゃないでしょうかね。また、仏教の僧侶に対して、ちょっと見下していましたね。デンマークに居るときのお坊さんのイメージは物乞いをして貧しいというものでしたが、日本に来てみると住職達はプライドと地位を持っていることが分かったようです。壮大なビジョンはあったでしょうけど、あそこで（注：デンマーク牧場）はやっぱりちょっと無理でしたね。時代に合わなかったですね。

佐保 トムセンはそのころ何か宗教的な集いを行なっていましたか。あるいは他所の教会に行くとか。

青砥 礼拝堂がまだ無かったものですから、トムセンさんの家だったか、ムラーさんの家で礼拝をやったのは覚えています。

佐保 トムセンの奥さんとは何か接点がありましたか。

青砥 接点はなかったですね。すらっと背の高い人でした。記憶がないです。子どもさんは日本の小学校に行ったんですよ。デンマーク語よりも日本語の方が分かり易くて好きだと。

佐保 トムセンのことはどう評価しますか。

青砥 全体としてトムセンの計画というかビジョンは、やっぱり失敗だったんですね。それはフェンガーさんも先輩として、北海道で生活したこともあり、分かっていたんでしょうね。僕たちがみてもトムセンのビジョンというのは、やっぱりお金に任せて、お金がありましたよ。それだけの土地を買って、建物を建てて、最初は開拓の為に近所の人をよく雇っていました。でも、時代に合わなかったんです。

<フェンガーとトムセンの関係>

佐保 フェンガー『自伝』にも書いてあるのですが、トムセンとは余り仲が良くなかったと・・・。

青砥 そうでしょうね。フェンガーさんは酪農が魂という人で、トムセンは信仰と経済的なこ

佐保吉一

とを考える人でした。このフェンガーさんというのは、酪農一筋というかちょっと頑固なところがありましたから。フェンガーさんは北海道で酪農もされ、指導してきた人ですから、それでやっぱり酪農についてはちょっと譲らないところがあったですね。

佐保 見ていても二人の仲が悪いとか、分かりましたか。

青砥 見てる前ではあれですから。でも合わないというのはよく感じていましたね。酪農や農場のことは何も分からないトムセンがフェンガーによく口出しをしていました。それで通訳の嶋屋さんが苦勞していました。間に入って。

佐保 フェンガーはそうすると、トムセンとはあまり付き合わず、関わっていたのは奥さん、青砥さんたち、そして嶋屋さん夫婦という感じで、何か孤立していたという感じでしたか。

青砥 うーん。北海道で酪農を教えて、酪農学園の先生方もみんな弟子みたいなものですから、私はフェンガーさんのことは別格だと思っていました。フェンガーさんと一緒に酪農が出来ることが、恵みなんだからと樋浦学長に言われて来ましたから、雲の上のような人だと思っていました。だけど割と親しくしてもらい、奥さんなんかは茶目つ気がありましたからね。孤立していたかどうかは計りしれませんですね。

<デンマーク牧場を去った経緯およびその後>

佐保 牧師になられたのはデンマーク牧場のトムセン牧師の影響を受けたからでしょうか。

青砥 それは違いますね。前に神学校に 2 年間いて、そこでオーツ宣教師にお世話になって、その頃から自分は酪農の道に行くのか、牧師の道に行くのか迷いました。その中で着実に牧師への道が積み上げられていったんでしょうね。それでやっぱりトムセンさんの元にも、本当の意味で自分の将来は見えなかった。その給料で将来生活できるという不安がありましたね。フェンガーさんは帰っちゃうし、モーラさんが来ても短期間ですし。

佐保 酪農学校の生徒もあまり増えなかったみたいですね。

青砥 デンマークでやっている国民高等学校を建てたんですけども、全然日本の土壤に合わなかったみたいですね。それで生徒も全然集まらなくて、そのなかで私は自分がデンマークに行っても、ここではそれを活かすことが出来ないと、判断したんですね。そして牧師の道を歩もうと決めたんです。三愛塾に影響を受けた原点に戻って、牧師になろうと思い、農村伝道神学校に進学しました。農業家で牧師になった人はいないです。そうしたら、ムラーさんがそこを辞めて神学校へ行ったのに奨学資金をくれたんです。喜んでくれたんですね。ムラーさんとはフェンガーさんが帰ってから 1 年位一緒にいました。

佐保 その後デンマーク牧場を訪ねられたことはありますか。

青砥 一度訪ねたけれど、殆ど行っていませんね。一度だけ鳥羽教会に勤務した際に寄ったことがあります。丁度農学校の卒業式の時だったですかね、生徒が 2, 3 名でした。多分ロスゴーさんが式で説教をしていました。

佐保 フェンガーが帰国してから、付き合いはありましたか。手紙が来たとか。

青砥 いや、ないですね。僕らもデンマーク語や英語で書くというのも無理だし。

<デンマーク牧場に対する思い>

佐保 最後にお伺いしたいのですが、青砥先生はデンマーク牧場に対してどのような思いを持っておられますか。何が一番印象に残っておられますか。

青砥 そうですね、フェンガーさんは酪農に携わることに、酪農にプライドを持っていました。良い意味で。それがデンマークという国の復興と繋がっていました。酪農こそが国を支えていくというプライドを持っていました。酪農に関しては毅然としていて、それが見学に来た人にも、酪農に対する使命というか、そういう雰囲気伝わってきましたね。デンマークの復興に酪農が大きな意味を持っていたんですね。日本は丁度そのころ（注：1964年頃）、工業化が進み、東京オリンピックの時期でした。それで酪農に目を向ける人はいなかった。みんな工業化に飲み込まれていっていました。その中で、フェンガーさんは酪農に情熱を持って生涯を捧げてきたという感じがしました。残念ながら静岡ではトムセンのスタンスもあっただろうし、うまくいかなかった。本当に残念だったと思います。

佐保 本日は長時間に渡り、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

2-4 青砥氏の写真アルバムから



図 3 開墾から始まった初期のデンマーク牧場（1963年6月）



図 4 牛舎と北海道から来た乳牛



図 5 酪農大学開拓同志会より来た6名の実習生(1964年3月)



図 6 牧柵を作り、石灰を撒いた苦しい、楽しい2週間（実習生とともに）



図 7 北海道からの実習生と
フェンガー夫妻



図 8 フェンガー宅で酪農の講義と
交わりの時



図 9 デンマーク牧場でのフェンガ
ー夫妻



図 10 北海道から来た牛を世話
するフェンガー



図 11 実習生と嶋屋夫妻



図 12 酪農大学から来た西川氏
(1964年4月より)



図 13 フェンガー夫妻と訪問者
(西川氏と青砥氏も写っている)



図 14 フェンガー夫妻を見送る駅で



図 15 馬を使つての開墾（青砥氏）



図 16 日本ではまだ本格的なトラクターのない時代にデンマークから持ってきたトラクター



図 17 酪農学校と寄宿舎



図 18 フェンガーの後任のムラー（左から2人目）



図 19 デンマークから来た赤牛



図 20 赤牛とデンマーク牧場全景

おわりに

これまで日本でエミール・フェンガーの足跡を追ってきたが、フェンガーの元で実際に一定期間働き、デンマーク農法を学んだ方と出会ったのは今回が初めてであった。時間が 50 年以上も経過しているという点はあるが、今回の青砥氏へのインタビュー記録は貴重な一次情報である。さらに写真からは開墾の苦勞、そしてこれから理想の牧場を作っていこうとするデンマーク牧場の初期の様子を窺うことができる。インタビューおよび写真から分かる事柄を整理し直し、本稿のまとめとしたい。

(1) インタビューから分かること

今回インタビューを行なった青砥氏は、フェンガーおよびトムセンの両方を知る立場にあった。基本的には農業助手ということでフェンガーと共に一日の大半を過ごし、同じクリスチャンそして雇用主-被雇用者という立場からトムセンとも接点があった。デンマーク語を解さないという点はあるが、同じデンマーク牧場という場に居合わせた青砥氏の発言は重要である。

<新しく分かった事柄>

これまでではフェンガー自身が関係者にデンマーク語を教えた記録は無かったが、今回の青砥氏へのインタビューでそれが明らかになった。なお、フリーダ夫人が英語を教えた記録は山形時代、静岡時代にあり、『自伝』等に記されている¹⁸。

また、トムセンが農業助手達の生活習慣にまで立ち入って、指導したり干渉している様子が明らかになっている。トムセンの気むずかしさや彼に対して気を遣ったことについても青砥氏はインタビューの中で再三述べていた。このようなトムセンの姿勢も後にみるフェンガーとの関係に影響を及ぼしていると思われる。

デンマーク牧場に関わった関係者が後に牧場経営に携わっていることも注目に値する。特に青砥氏の同僚であった西川氏は後に北海道の瀬棚で西川牧場を経営し、そしてデンマーク牧場で初めてデンマーク式酪農を経験した嶋屋康男氏も後に牧場を始めている¹⁹。

さらに、河村（正人）氏の情報である。河村氏は 1990 年に北海道の瀬棚で瀬棚フォルケホイスコーレを創設したことで知られるが、同氏が 1964 年にデンマーク牧場に来た酪農学園大学からの実習生でもあったことが、今回青砥氏のインタビューを通じて判明した。このように今回のインタビューを通じて新たな人的情報を得ることができた。

<確認出来た事柄>

青砥氏へのインタビューを通じて重要な点が確認出来た。まず、フェンガーとトムセンの関係である。両者の険悪な関係については、拙稿でも当事者の記述資料を用いて明らかにしたが²⁰、それらはフェンガーを始めデンマーク人側からの記録で、日本人側の記録ではなかった。今回青砥氏のインタビューから、「合わなかった」、「トムセンが口出しをする」、「トムセンは経済的なことを考える人で、フェンガーは酪農一筋というかちょっと頑固なところがあった」等

の発言があり、端から見ていても、日本人側からしても二人の関係が良好でなかったことが確認できた。そして、通訳という立場で両方に関わった嶋屋氏が板挟みで苦労した様子も窺えた。加えて 1965 年鳴り物入りで開設した農学校が期待に反して、生徒募集がうまくいかなかったことも確認出来た。現場にいた青砥氏によると、当時の日本は東京オリンピック開催前後の高度成長時代で、第 1 次産業から第 2 次、3 次産業に人が流れ込み、酪農に目を向ける人はいなかったという。トムセンのビジョン、即ち農民を布教のターゲットにし、布教をより進展させるために農民が興味を示しそうなデンマーク農業（酪農）を実践する農場を備えた農業センターおよび農学校の設置、さらに異なる宗教を持つ者が集まる場としてのブラザーホームを建設しようとする計画、と日本の現実とが噛み合っていなかったのである。

（2）写真から分かること

デンマーク牧場の土地買収は 1962 年から開始され、1963 年からは本格的な開墾が始まった。図 3 からは牧場の開墾が始まった 1963 年 6 月頃の草木が鬱そうとする様子が見て取れる。今回掲載した写真の大半はフェンガーの『自伝』に記された事柄の裏付けとなっている（図 4-7, 図 10, 図 11-12, 図 14）。特に北海道の酪農学園大学から訪れた農業実習生の写真はどれも楽しそうで（図 5-7）、フェンガーが彼らの滞在を喜んだことが写真からも確認できる。さらに、フェンガーの心に残ったという袋井駅での見送りの場面も図 14 に写っている。

また、写真からはフェンガーと関わりのあった人物も確認できる。フェンガー夫妻が主に付き合い、『自伝』にも登場する西川氏、嶋屋夫妻である（図 11-12）。『自伝』によると外部からの来訪者も多く、その一部が写真にも収まっている（図 13：来訪者名は不明であるが、青砥氏と西川氏も写っている）。そして、図 8 であるが、フェンガー宅で行われた酪農講義および歓談の写真である。トムセンとは違うフェンガーの人となりを示す一枚である。

インタビューで青砥氏が述べていた大型トラクターも確認できる（図 16-17）。そして、開設の準備を進めていた農学校とその寄宿舎も写っており、その規模が分かる（図 17）。青砥氏が苦労して北海道から貨車で運んできた乳牛も、牛舎前等で確認することができる（図 4, 図 10）。なお、写真の中でも貴重なのがフェンガー夫妻の写っているものである。これで二人が確かにデンマーク牧場に居住したことが確認できるのである（図 7, 図 9, 図 13）。特にこれまでエミール・フェンガーが単独で写っている写真は存在したが、夫人が写っているものは皆無であったため、これらの写真は重要である。

青砥氏の写真アルバムは時系列で写真が並べられているが、最終頁の写真がデンマークから来た赤牛である（図 19-20）。これらの牛は動物を輸入することが困難な時代に、農林省と繋がりがあったフェンガーの尽力で実現したのであった。牛と共に牧場の全体像も見てとれる貴重な写真である。

以上のように、青砥氏のインタビューおよび提供頂いた写真より、これまで史・資料不足のため余り知られてこなかったフェンガーの静岡時代の一端が明らかになった。特にフェンガー夫妻の写った写真や 1963-65 年のデンマーク農場の開墾の様子が写った写真は貴重である。さ

らに、インタビューを通じて初期のデンマーク牧場に関わった人々に関する極めて貴重な情報を得ることが出来た。青砥氏から九州で牧場を営んでいるという情報を得た嶋屋康男氏（フェンガーの通訳）に関して、その後インターネットを利用して検索調査を実施した。その結果、嶋屋氏は山口県下関市豊田町で嶋屋牧場を営まれていることが判明した。早速連絡をしたところ、妻の尚代さんが健在で資料もお持ちだということが分かった。

今後、フェンガーの静岡時代に関してさらに研究を進めるためには、現在北海道南部の瀬棚に居住されている可能性のある、西川氏（青砥氏のデンマーク牧場での同僚）、河村氏（酪農学園大学より農業実習でデンマーク牧場に来た6人の内の一人）、さらに上述の山口県の嶋屋尚代さんを訪問して調査（インタビュー、文書、写真）を進め、得られた事実を記録化したい。関係者が高齢化する中、早急に調査を実施する必要がある。

最後に、フェンガーの帰国が予定通りの時期だったのか、あるいはトムセンとの仲が良くなかったことが原因で早期に帰国したのかは、今回も直接的な情報を入手することができず分らなかった。引き続き今後の課題としたい。

[付記]

本稿のために、インタビューを引き受け、当時の貴重な写真の複製を許可していただいた日本キリスト教会釧路教会の青砥好夫牧師に心よりお礼申し上げます。

註

- 1 フェンガーの没年についてはデンマーク側の資料では現時点で未確認である。新庄農業学校の学校司書であった信夫百合子さんが在デンマーク日本大使館に調査を依頼した結果では、夫妻とも昭和58年（1983年）に死亡したとのことである。留場俊充「デンマーク農場50年の検証 -E・フェンガーのやろうとしたもの・残したもの-」『北村山の歴史』第3号、2001年5月、36頁。
- 2 札幌滞在中に末娘が誕生している。
- 3 モーテン・ラーセン Morten Larsen は札幌の南部に位置する真駒内に配置され、15ヘクタールの農地を割り当てられ、デンマーク人助手のペーター・スナゴー Peder Søndergaard と共にデンマーク農法を実践した。
- 4 例えば以下のものがある。北海道庁内務部『外人農家概況（第1次）1924年、北海道庁産業部『外人農家概況（第2次）1927年、特別報告第6号『デンマーク農法指導農場業務報告』山形県立農業試験場、1957年11月。
- 5 エミール・フェンガー「山形県の酪農に対する私見」『農業山形』第2巻6号、1951年6月。Emil Fenger: 'Lidt om Landbruget i Japan', "Vort landbrug", Nr. 43, 1924, s.23. Emil Fenger: 'Mulighederne for at afsætte danske Frø i Japan', "Dansk frøavl" Årg.36, 1953, ss. 249-50.
- 6 日本キリスト道友会『新靈山教会 献堂40周年記念誌』2009年10月
- 7 デンマーク牧場を立ち上げ、全体を統括したデンマーク人牧師ハリー・トムセン Harry Thomsen に関しては、ヘアマンセン Christian M. Hermansen による一連の研究（英語）がある。なお、市報「ふくろい」については参考文献を参照。
- 8 拙稿「デンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの静岡時代（1963-64年）」『東海大学紀要文学部』第108輯、2017年、55-70頁。
- 9 現在この宗教組織は改名してアエロパゴス Areopagos と呼ばれている。

Cf. <http://www.areopagos.no/index.php/om-areopagos/hvem-er-vi/historien>

- ¹⁰ バンフレットでの名称は「新霊山の農業学校」とあり、最大収容定員は40名である。学期は1965年11月1日～1966年3月31日の5ヶ月間で、入学資格者は「義務教育を修了し、常識のある人」となっている。
- ¹¹ しかし当時、日本の酪農は不振で思うように生徒が農学校に集まらなかった。やがて為替の問題や北欧からの資金も途絶え、農学校は閉鎖される。その後、フリースクールとして、不登校や引きこもりの子どもたちを対象とした共同生活寮「デンマーク牧場こどもの家」と形を変えて存続した。また法人の運営も北欧から派遣される宣教師陣から日本人の手に託され、1985年には日本福音ルーテル教会との法人合同が実施された。そして2003年には、社会福祉法人「デンマーク牧場福祉会」が創設された。2009年現在では特別養護老人ホーム・ディアコニア、児童養護施設・まきばの家、青少年自立援助ホーム・こどもの家、精神科診療所・こひつじ診療所を開設し、この土地において、教育・福祉・宣教の取り組みが進められてきている。そして2009年、新霊山教会が献堂40年を迎え、記念誌が発行された。日本キリスト道友会『新霊山教会 献堂40周年記念誌』2009年。
- ¹² Emil Fenger: *Langs med vejen, København, 1970.* 以下、『自伝』と略。
- ¹³ 本稿のインタビュー部分も青砥氏ご本人に内容を確認頂いている。
- ¹⁴ 酪農学園短期大学（北海道野幌）が設立された1950年、大学に進学できない農村青年のために、大学を開放して開催された農民教育機関である。当時の短大学長樋浦誠(1898-1991)が始めた。三愛塾に関しては次のものが詳しい。石山貴士「北海道における大学拡張運動の萌芽とその展開 —三愛塾運動の系譜と活動内容を中心に—」『教育学の研究と実践』第4巻、65-73頁、2009年。
- ¹⁵ ムラーは本名が Kristian Møller (1894-1984)。デンマークのハマロム農業学校 Hammerum landbrugsskole の校長を長年務めた。日本の経験を記したものに次のものがある。K. Møller: *Sælsomt slynges de tråde, Herning, 1974.*
- ¹⁶ 正式には、酪農学園大学開拓同志会からの実習生である。
- ¹⁷ 現在の基督教独立学園高等学校（山形県西置賜郡小国町）。基督教無教会派の創設者内村鑑三の考え方をもとに、1934年に前身である基督教独立学校が設立され、戦後1948年に新製の基督教独立学園高等学校として再発足した。
- ¹⁸ 拙稿「デンマーク人農業指導者 エミール・フェンガーの山形時代（1951-54年）」36頁。『自伝』189頁。
- ¹⁹ インタビューの中では九州で牧場を経営しているとあったが、調査の結果、山口県下関市であった。
- ²⁰ 拙稿「デンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの静岡時代（1963-64年）」『東海大学紀要文学部』第108輯、2017年、65頁。

参考文献

- Emil Fenger: *Langs med vejen, København, 1970.* (『自伝』)
- Chistian M. Hermansen: 'Danish mission in Japan - the beginnings' 『関西学院大学キリスト教と文化研究（関西学院大学）』第13号、2011年、79-105頁。
- Chistian M. Hermansen: 'Ene Marie Thomsen: Her Missionary Years in Japan 1955-1966', 『キリスト教と文化研究（関西学院大学）』第17号、2015年、121-143頁。
- Chistian M. Hermansen: 'Harry Thomsen and Shin Rei San: The Foundation of a Brother Home for Truth-seekers (安田雅美教授 廣瀬典生教授 退職記念号 栗林輝夫教授 追悼記念号)' 『外国語・外国文化研究（関西学院大学法学部）』第17号、177-262頁、2016年。
- K. Møller: *Sælsomt slynges de tråde, Herning, 1974.*
- 『広報 ふくろい』第75号、1963年5月。

-
- ・『広報 ふくろい』第 79 号、1963 年 8 月。
 - ・『広報 ふくろい』第 85 号、1964 年 1 月。
 - ・『広報 ふくろい』第 92 号、1964 年 10 月。
 - ・佐保吉一「大正時代北海道招聘デンマーク農家に関する一考察（前）－エミール・フェンガーの書簡を中心に－」『北海道東海大学芸術工学部紀要』第 29 号、2006 年、15-22 頁。
 - ・佐保吉一「大正時代北海道招聘デンマーク農家に関する一考察（後）－エミール・フェンガーの書簡を中心に－」『東海大学国際文化学部紀要』第 29 号、2013 年、15-22 頁。
 - ・佐保吉一「デンマーク人農業指導者 エミール・フェンガーの山形時代（1951-54 年）」『東海大学国際文化学部紀要』第 6 号、2013 年、27-56 頁。
 - ・佐保吉一「デンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの静岡時代（1963-64 年）」『東海大学紀要文学部』第 108 輯、2017 年、55-70 頁。
 - ・日本キリスト道友会『新霊山教会 献堂 40 周年記念誌』2009 年 10 月。
 - ・松田正幸「牛舎が新しく生まれ変わりました －その歴史を振り返る－」『みぎわ（浜松聖書集会）』第 57 号、2017 年、169-173 頁。
 - ・留場俊充「デンマーク農場 50 年の検証 －E・フェンガーのやろうとしたもの・残したもの－」『北村山の歴史』第 3 号、2001 年